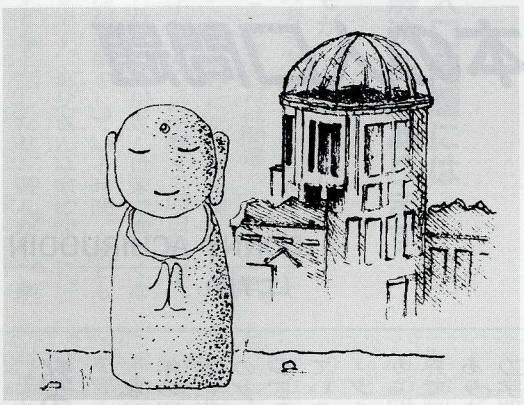
# 異文化交流



文・難波紘二
(総合科学部)
挿絵・梅本和枝
(学校教育学部小学校教員養成課程美術領域)

最近は、休みの日に近所の公園を観察している。生まれる前からある公園なので、断続的だが五十年以上定点観察していることになる。

日本は貧しい、広島の街は緑が少なくて殺風景だ、公共施設が不備だ、などと長い間思ってきた。が、ふと気づけば、トイレも水呑み場もブランコも滑り台も遊歩道も、立派に整備され、樹木も繁茂し、付近の平和公園から移住した鳩が増えて、静かに餌をあさっている。二十年以上前に、いささか羨(せん)望の念とともに眺めた欧米の公園の風景とそっくりではないか。

公園の一角に小さな地蔵を安置したお堂がある。戦後いつの頃からかそこにある。誰が供えたのか、湯飲みの花立てに菊の花が供えてあり、ローソクや線香も置かれている。

前に佇(たた)んでいると、小学校の低学年とおぼしき、あどけない表情をした男の子が話しかけてきた。門歯が小さく、頬骨が突出しており、下顎骨の発育も良いとは言えない。食べ物が軟らかいものに変わったことをまざまざと感じさせる、未来人の顔である。

「それは、なーに?」

「これはお地蔵さんだよ」

「おじぞうさんて、なーに?」

男の子の質問に気安く答えたつもりだったが、すぐにとんでもない会話が始まったことに気づいた。

「うーん。お地蔵さんて…、小さな仏さんのことだよ」

「どうしてここにあるの?」

「昔ね、空から原爆が落ちてきて、ここでたくさんの人が死んだんだよ。その可哀想な人たちを慰めるためだよ」

「ゲンバクって、なーに」

もう私はパニック状態である。子どもとの会話がこれほど難しいとは思わなかった。

「空から落ちてきて、爆発する恐ろしい爆弾だよ。キミは爆発を知っているかなあ。大きな音がして、破裂するんだけどなあ」

「ボク、バクハツ、知っているよ。クレヨンシンチャンでね、地下の悪の帝国がね、バーンとバクハツするんだよ。何もかも吹っ飛ぶんだよ」(何だ、これは!?)

男の子はまったく屈託がない。知的好奇心に富み、人見知りをせず、聡明そうな眼をしている。この子には、空から爆弾が降ってくることや、それが瞬時にして何十万人の人間の生命を消滅させてしまうことなど、想像すらできないのだろう。

子どもの死亡率は著しく低下しているから、十年後にはほぼ間違いなく、この子は大学生になるだろう。むしろこの子は例外ではなくて、来たるべき世代の若者のプロトタイプのように思える。

戦争と貧困を知らない恵まれた子どもたちの出現、という事態は、日本の歴史始まって以来のことだ。二十年近く前から始まったこの動きは、日本の成功の結果であり、掛け替えのない平和の産物である。しかしこの子どもたちがそのまま大きくなると、現実と仮想現実との境が不明確で、恐ろしく少数の語彙(い)しかもたない大人ができるのではないか。それが平和の必然的産物としたら、少し情けない。

子どもは、テレビアニメの世界とは違う現実があることを、やがて学ばねばならない。爆発というひとつの言葉にも、ビッグバンや核兵器や火山や打ち上げ花火やプロパンガスや人口問題や親父のかんしゃくや岡本太郎まで、いろんな含意と連想が含まれている。それらを理解することが、外の世界を了解し、他者とのコミュニケーションを可能にする方法だと知る必要がある。教育とはそのためのプロセスにほかならないだろう。

異文化間交流は、今や外国との話だけではない。考えてみれば、キャンパスの中の大学生も、年ごとに変わる異文化の波ではないか。大学教育とは、教官と学生という世代間の異文化交流なのではないか。そう承知した上で、世代を超えて、伝えるべきことを伝えるのが教師の役割と思う。

(なんば・こうじ)